Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2014, Vol.23, 151-159

論 文

第二次世界大戦後の国語教科書における〈宮沢賢治〉像
－理想的人間像の変容－

久保田　治　助〔鹿児島大学教育学部（地域社会教育）〕・木　村　陽　子〔埼 玉 東 萌 短 期 大 学〕

Kenji Miyazawa image in the Japanese language textbook after world war Ⅱ：
Transformation of the ideal personality

KUBOTA Harusuke・KIMURA Yoko

キーワード：国語科教育、国定教科書、宮沢賢治

1　敗戦前後の〈宮沢賢治〉

宮沢賢治（1896－1933）が亡くなったあと、その遺品の中から発見された「雨ニモマケズ」[1] の詩が、それから数年を経て日本が突入した国民精神総動員の時期（1937年９月から敗戦まで）に、あたかも「贅沢は敵だ！」や「欲しがりません勝つまでは」などと同様の精神的スローガンのように受容され、広く人口に膾炙したことはよく知られている。

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシヅカニワラツテヰル
一日二玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ（後略）

「忍従や耐乏を徳とする」この詩の「精神」には「支配権力の政治的意図にひきずりこまれる弱点があった」と伊藤信吉が指摘するように[2]、数ある宮沢賢治のテクストの中でもとりわけ「雨ニモマケズ」、そして「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と説いた「農民芸術概論」[3] が、戦時下の民衆の士気の高揚に利用されたことは否めない。

たとえば1942年、生前の賢治と深い親交があり彼の主治医でもあった佐藤隆房は、賢治が「ミンナニデクノボウトヨバレ」の一句で「日本臣道の『醜の御楯』と同義なるべき雄渾無比なる日本民道精神を誓って居る」と言い、また「農民芸術概論」では「八紘一宇の大精神を昂揚」[4] していると説いた。また、同じく生前の賢治と親交のあった森荘巳池は、1943年に刊行した賢治の評伝の中で、「雨ニモマケズ」や「農民芸術概論」の中の言葉に準えて、「何百年としひたげられて来た、大東亜共栄圏の中の、よはい、たくさんの民族を、病気の子どもや、つかれた母と見ることは、少しもさしつかへない」、「米英が、アジアから去らないうちは、アジアの幸福はあり得ない」[5] などと言及した。さらに1944年、当時、法政大学文学部哲学科教授だった谷川徹三は、講演「今日の心がまへ」の中で「雨ニモマケズ」が「その精神の高さ」において「明治以後の日本人の作った凡ゆる詩の中で最高の詩」であると絶賛したが、本講演におけるそもそもの谷川の趣旨は、演題も示しているように、今まさに国家的危機に直面している日本国民に〈死の「心がまへ」〉を説くことにあった。

「雨ニモマケズ」の精神、この精神を若しわれわれが本当に身に附けることができたならば、これに越した今日の心がまへはないと思つてゐます。（中略）昔の武士達は、平常時には異常時の心がまへを、異常時には平常時の心がまへをもつやうにと教へてをります。事実昔の

武士達はその心がまへで生き且死んだのであります。平常心是道といふ言葉が東洋の古い言葉にあります。これは人人が非常の場合に絶えず臨み、生死の境を幾度も潜つて来なければならなかつた時代に、生れ愛好された言葉でありまして、それだけに今日のわれわれがもう一度噛みしめるべき言葉であると思ひます[6]。

小熊英二がその著書『民主と愛国』の中で「モラルの焦土」と巧みに表現したように、昭和10年代以降、弾圧への「恐怖と保身」、あるいは「知識人の社会的責務」から、多くの言論者が戦争協力の文章を発表した[7]。ただし、宮沢賢治に関してはやや事情が異なっているのは、第一に、当の賢治がすでに1933年に病没しており、実際に彼のテクストを掲げて戦争協力を行ったのは彼の読者たちであったということである。

また第二には、そうした文脈に最も利用された「雨ニモマケズ」と「農民芸術概論」が、生前の賢治によって公にされたものではない「草稿」テクストであり、「雨ニモマケズ」に至っては、闘病中の彼が手帳に記していた自省や願望の言葉の中に埋もれていたものであり、賢治に「作品」としての意図があったかどうかさえ定かではない、きわめてプライベートな性格を有していたということである。

つまり、生前にわずかな著作を発表しつつも無名のままにこの世を去った宮沢賢治は、死後10年の間に、当人の意図をはるかに超えた受容のされ方で、〈近代文学史上最高位の詩人〉として喧伝されるに至ったのである。とは言え、本稿の関心は〈宮沢賢治〉の、そうした戦争協力の内実を明らかにすることにあるのではない。むしろ、結果として「忍従や耐乏」の体現者、〈死の美学のイデオローグ〉ともいうべき戦時の理想的人間像として価値づけられた〈宮沢賢治〉という表象が、敗戦を契機とした価値の大転倒を経て、敗戦後どのように受容されたのかということにある。

本稿ではこうした問題を考えるにあたり、戦後の国語教科書における賢治テクストの収録状況の検証を中心に据えたい。周知のとおり、「雨ニモマケズ」は戦後の中学国語教科書の定番教材として、1960年代中ごろまでその影響力を長く保持し続けた。しかし前述したように、戦中の〈宮沢賢治〉は日本精神と結びつけられて称揚される傾向があり、特に「雨ニモマケズ」の「ジブンヲカンジヨウニ入レズ」や「ミンナニデクノボウトヨバレ」の句は、「醜の御楯」にも通じるような「臣民」の自己犠牲の精神と解されることが多かった。そのようなものとして戦中に価値づけられた作者、およびテクストが、民主主義を大きく掲げた戦後教科書へ掲載されることに対して、何ら問題が生じなかったとは考えにくい。換言すれば、〈戦時の理想的人間像〉が、まったくそのままのかたちで〈戦後の理想的人間像〉として受け入れられたとは考えがたく、〈宮沢賢治〉という表象は、敗戦後、戦後的価値によって再解釈を余儀なくされたものと予測される。だとすれば、それはいつ、どのようなかたちで行われたのか。

まずは敗戦直後の状況から確認したい。1946年２月、国文学者の石田吉貞が「雨ニモマケズ」に言及して、「今後の日本の新しき生活の基調」となるべき詩として「近来とみに世の注目を集めてきた」[8] と論じたように、敗戦直後の〈宮沢賢治〉は意外にも「戦争協力」という批判をほとんど浴びることがなかった。それを示すように、第６次国定教科書（1947年初版）には、小学校（４年の下）で「どんぐりと山ねこ」が、中学校（１年の１）で「雨にもまけず」が、高等学校（２年の下）で「農民芸術論（ママ）」が収録されている。

1946年３月に来日した第１次アメリカ教育使節団は、事実上文部省の独占となっていた国定教科書を検定制に改めるように勧告し、1947年３月に公布された学校教育法にも検定制導入が明示された。しかし、翌４月の新学制発足には間に合わず、実際には1949年４月からの開始となった。その移行の期間に、暫定的に用いられたのが第6次国定教科書である。占領下における国定教科書の編集・発行・供給に至る工程は、民間情報教育局（ＣＩＥ）の厳しい監視下に置かれた。1939年から敗戦を跨いで1949年まで文部省図書局図書監修官の任にあった石森延男によれば、「決定原稿はすべて英訳し、タイプに四通うち、ＣＩＥの係官

に提出、検討があって修正され、認可される。さらに組版許可を得て、印刷に回す。見本が認められて、はじめて正式の印刷が認可される。この手続きは、まことにきびしく行われ、もし誤りがあれば、文句なしに罰せられた」[9] という。こうした状況下にあった戦後国定教科書に、戦意高揚にも利用された「雨ニモマケズ」や「農民芸術概論」が収録されたことは注目に値するだろう。

ところで、第6次国定教科書への「雨ニモマケズ」掲載を決めた石森延男によれば、「だれがなんといってもこれだと、ひとりぎめのようにした。この詩にこもっている人間としてのほんとうのよさは、戦後であろうと、戦前であろうと、また戦中であろうとかわるものではないと、かたく信じたからである。この人間のよさを土台にして、小学校、中学校の国語教科書を編集し、さらに高等学校用のを作り上げてしまった」[10] という。小学校から高等学校まで、計36冊の国語教科書をわずか14か月で完成させなければならなかった石森が当時最も悩んだのは、「民主主義」という新しい社会の求める価値規範を具体的にどのように提示したらよいのかという問題だった。いまだ教育基本法も学校教育法もできていなかった当時、教育勅語に代わる何らかの道徳的拠りどころを必要とした石森は、熟慮の末、「人間としてのほんとうのよさ」はいかなる時代にも通用する普遍的なものだという信念の下に、そのモデルを戦時の理想的人間像=「雨ニモマケズ」に求めたのである。

こうして戦後国定教科書への収録を果たした両テクストであるが、ところがその後の経緯を見ると、「雨ニモマケズ」が長く1971年まで掲載されつづけたのに対して、「農民芸術論」は翌年発行の訂正再版で突如「神曲」（原作ダンテ・上田敏解説）に変更されるという、極めて対照的な結果となった。ではいったい国語教材としての両テクストの差異はどこにあったのか。次節以降、明暗を分けたその要因について詳しく検証してみたいと思う。

2　消された「農民芸術論」

「農民芸術概論」の肉筆原稿は戦災で消失して現存しない。今日伝えられている内容は、論の章立てを箇条書き風に記した「農民芸術概論」、それをやや詳しく述べた「農民芸術概論綱要」（以下「綱要」）、そのうちの一章に関する「メモ」とされる「農民芸術の興隆」の三部から成る。本稿はここまでそれらの総称としての「農民芸術概論」の語を用いてきたが、本節で論じる第6次国定教科書所収の「農民芸術論」というテクストが「綱要」中の本文から構成されていることから[11]、厳密をきすために、以下「綱要」中の文章を指す場合には「綱要」、総称を指す場合には「農民芸術概論」と記すことにする。

新制高等学校は小・中学校に一年遅れて1948年４月に発足したが、しかし1947年４月の時点で新制度に移行できなかった旧制中学の４－５年生が存在したため、一年前倒しで編集されたのが初版『高等国語一』（上・下）、『高等国語二』（上・下）であった。このうちの「二下」に「農民芸術論」は収録されたが、なぜか翌年「国語学習の手引き」を補充した訂正再版発行の折にダンテ「神曲」に差し替えられてしまった。

戦後の国語教科書に詳しい吉田裕久は、「教材の交替は珍しいケースで、この一例だけ」であり、「内容が問題になったのだろうか」[12] と疑問視しているが、果たして当時、本テクストの「内容」をめぐって大きな問題が生じていた。1950年２月の谷川徹三の言によれば、彼が一昨年、長野に講演に出かけた時、そこの先生たちが「農民芸術論」中の「第四次元の芸術という言葉を、第四階級の芸術として理解」していたことに「おどろいた」という。谷川によれば、賢治には相当数の社会主義関係の蔵書があり、彼の思想傾向が「その方面に傾いていた」事実は否定できないが、「しかしそれはどこまでも僅少の傾斜」[13] であったという。第６次国定教科書の編集委員でもあった谷川は[14]、1948年12月の講演で「詩の代表作を挙げよといわれたら『雨ニモマケズ』」、「論稿の代表作を挙げよといわれたら『農民芸術概論綱要』」[15] と発言しており、両テクストの国定教科書収録にも当然小さからぬ影響力をもっていただろう。ところがその思い入れ深いテクストの一方が、彼が嫌悪を公言してはばからなかった[16]共産

主義の文脈へと読み替えられていたのだから、「おどろいた」のも無理はない。このことに俄然反発した谷川は、「賢治が本質において」「宗教的人間」であったことを力説し、もしも「第四次元」を「第四階級」などと解するとしたら「それは全く賢治を解していないこと」であると論駁した。

ではなぜ、このような〈マルクス主義者=賢治〉像が敗戦直後に流通するに至ったのか。それについては谷川の言及もなく詳細は不明であるが、要因の一つとして敗戦直後に発表された「新資料」の影響が小さくなかったように思われる。1946年10月、宮澤賢治の「遺稿」として「眼にて言ふ」、「風がおもてで呼んでゐる」の２つの詩が雑誌『群像』誌上に、「学生生徒諸君に寄せる」が雑誌『駿台論調』誌上に、賢治の実弟の宮沢清六の提供によって掲載された。このうち「風がおもてで呼んでゐる」には「さあ起きて／赤いシャツと／いつものぼろぼろの外套を着て／早くおもてへ出て来るんだ」といった、「学生生徒諸君に寄せる」には「新たな時代のマルクスよ／これらの盲目な衝動から動く世界を／素晴しく美しい構成に変へよ」といった表現が含まれていた。

そもそも戦時中より流通していた〈家督を投げ打ち農民救済に生涯を捧げた偉人〉という〈宮沢賢治〉像自体が、「階級」を「大衆の敵」とみなす共産主義思想と多分に親和的だった。民主主義を掲げた新しい教科書への期待も相俟って、共産主義に共鳴的な教師たちが、その中に積極的に〈政治的人間〉像を読み取った向きもあっただろう。しかも敗戦後の日本を襲った深刻な飢餓は、たとえ個人が遮二無二働いたとしても生活の向上は望めないだろう、という無力感を蔓延させ、社会全体の貧困の是正を求める気運を高めていた。そうした空気の中、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」の一文で知られた「綱要」が共産主義の文脈で受容されたことは、ある意味では必然的結果であっただろう。

しかし他方では、この時期「農民芸術概論」に対する批判も言論界にあらわれはじめた。「綱要」中の「批評は当然社会意識以上に於てなされねばならぬ」の一文が、マルクス主義批判の文脈に解され、反発の対象となったのである。1946年9月、詩人の小野十三郎は右の一文を挙げ、「これによって詩作行為の自主性が擁護されてゐると思ふことは飛んでもない見当違ひ」であり、「擁護されてゐるのは、実は或種のイデオロギーであり、或種の社会意識であり、或種の恐る可き直観粗雑の理論」[17] であると批判を加えている。

このように、「農民芸術概論」は敗戦をはさんでわずか数年の間に、「軍国主義」の文脈に解されたり、「民主主義」を掲げた戦後教科書に収録されたり、「マルクス主義」の文脈に解されたり、逆に「マルクス主義批判」と解されたり･･･といった具合に、さまざまな政治信条を有した論者たちによって異なる解釈が施された結果、〈玉虫色〉ともいうべき多義的テクストとなってしまったのである。

恐らくこうした混乱を打開する最善策は、訂正再版で新しく補充される「国語学習の手引き」で、誤解の余地のない明快な注釈を付すことであっただろう。しかし前述した「第四次元の芸術」ひとつを例にとっても、この難解な語句に一義的、且つ平易な注釈を施すことは困難であり、結果的にはいたずらな混乱を回避したい気持ちが編集委員たちに共有されたのだろう、「農民芸術論」は「異例の削除」という形で、使用期間わずか１年にも満たずに[18]第６次国定教科書から姿を消したのである。

３　「新しい道徳」の台頭

敗戦直後の「雨ニモマケズ」への世評は、たとえば原爆によって妻を亡くし、自らも被爆した、当時広島文理科大学助教授だった小倉豊文が、賢治を「菩薩」に、「雨ニモマケズ」を「お題目」[19]になぞらえたことにも象徴されるように、概して高いものだった。いまだ深刻な飢餓が続いていた当時、「忍従や耐乏を徳」とする「雨ニモマケズ」は多くの人々の心情に合致したのだろう。しかし賛美の内容は、戦争中のそれとは必ずしも同質ではなかった。1943年には「大東亜共栄圏の中の、よはい、たくさんの民族を、病気の子どもや、つかれた母と見ることは、少しもさしつかへ

ない」と説いていた森荘巳池も、1946年には、一転、

> 宮沢賢治の書き残したもの、また日常の行蔵の、どこをさがしても、つひに一本の毛ほども、『神民』であるといふ思想は見当たらない。かへって、いちばん大事な『雨ニモマケズ』には『ホメラレモセズ、苦ニモサレヌ、デクノボウ』になりたいといふ、『凡夫』思想があるのである[20]。

とテクストを大きく読み替え、戦後思想との融和を図ることに腐心していた。戦争中「臣民」の自己犠牲の精神のように喧伝された〈宮澤賢治〉の「デクノボウ」精神は、今度は戦争への慙愧・自戒の念に発した「凡夫」思想として再解釈され、逆に声望を高めたのである。

このように敗戦直後の〈宮沢賢治〉は、一方では「農民芸術概論」に象徴される〈政治的人間〉像がマルクス主義の文脈で評価を得、他方では「雨ニモマケズ」に象徴される〈宗教的人間〉像が「菩薩」のように称揚される傾向があった。本来一人の人間の異なる側面にすぎない〈政治的人間〉像と〈宗教的人間〉像とが、それらを戴く勢力の思想対立も相俟って次第に懸隔を広げ、ときには両者が相克の様相を呈することさえあった。第６次国定教科書からの「農民芸術論」の「異例の削除」は、その一例であったと解せよう。

敗戦直後の石森延男が、「雨ニモマケズ」に込められた「人間のよさ」を土台に国語教科書を編纂したと語っていたように、戦中から敗戦直後にかけての〈宮沢賢治〉は、彼の生涯そのものがひとつの道徳的規範であるかのように多くの者たちから受容された。しかし、実際の生身の宮沢賢治は理想と現実の狭間で常に悩み、揺れ、自己否定と再生を繰り返す生涯を送ったのであり、そこには当然一貫性を欠くような言行の振り幅があった。第6次国定教科書の編集者たちは、そうした本来多面的要素を包含する生身の宮沢賢治から、自身が思い描く好ましい人間像のみを抽出して、より純化された理想的人間像に鋳直そうとしたものと考えられる。

そして同様の傾向は、〈マルクス主義者=賢治〉像を求めた者たちのうちにも見受けられた。敗戦直後に生じた〈宮沢賢治〉表象の混乱は、それぞれの信条こそ違え、その時代における人々の、彼への愛着の強さを表していたと言うことができるだろう。

ところが1950年代に入ると、〈宮沢賢治〉をめぐる情勢に大きな変化があらわれた。敗戦後数年を経て、「新しい道徳」を模索する気運が言論界に生じたのである。その背景には、1950年前後から教育界で議論の高まった「道徳教育」の問題があった。当時の教育界では戦後の青少年の非行や学力低下が重大視され、教育勅語や修身の復活、男女共学の廃止を求める声も大きく、文部省も「修身科」設置を前向きに検討しはじめていた[21]。これに対し現場教師の間には、わずか数年前まで軍国主義教育の主体であった文部省への不信、あるいは教え子を戦地に送ったことへの自戒の思いから、過去の悪しき「修身科」の復活を危ぶむ声が強かった。それゆえ1951年１月、教育課程審議会が時の文部大臣・天野貞祐に提出した答申には、「道徳教育の方法は、児童、生徒に一定の教説を上から与えて行くやり方よりは、むしろそれを児童、生徒に自ら考えさせ、実践の過程において体得させて行くやり方をとるべきである。[22]」と書かれてあった。

一方、〈生徒の主体性に基づいた道徳教育〉という理想は、すでに各地の教育現場では実践に移されており、1951年、そうした試みのひとつの達成として話題を集めたのが、山形県の山村の子どもたちによる作文集『山びこ学校』だった。本書では、たとえば「農民の貧乏はどこに原因があるのか」という問題に対して生徒たちが主体的に討議し、最終的に「農民をもっと金持ちにすること」、「自分だけよければよいという考えを捨てること」といった結論を提出していた。

これに対し、彼らのまとめ役でもあった教員の無着成恭は、本書末尾で「二宮金次郎の薪を背負って読書する像の前で『忍耐』」と『勤勉』の道徳をたたきこまれ、『人が八時間働くなら、十時間働け』と教えられてきた私は、この子どもたちの、そのような『忍耐』や『勤勉』の中にかく

されたゴマカシ、即ち貧乏を運命とあきらめる道徳にガンと反抗して、貧乏を乗り越えて行く道徳へと移りつつある勢いに圧倒され」[23] たと言及している。ここで言われる〈二宮金次郎〉型の人間像の条件に、〈宮沢賢治〉もまた適合することは言うまでもない。時をおかずに言論界には、「雨ニモマケズ」に人間の理想像を見るような価値規範は民衆に忍耐と勤勉を強いる旧弊道徳だ、といった批判があらわれはじめた。そして、そうした方向からの最も激しい批判を展開したのが、戦後「賢治信奉」への行きづまりからマルクス主義に転じた佐藤勝治だった。

信仰厚く学問への造詣も深い賢治の美点を知悉していた佐藤が「賢治信奉」の否定に至ったのは、たとえ彼が「善意の権化」であったにせよ、「雨ニモマケズ」が推奨する「イワンの馬鹿式の無抵抗主義」が、民衆の恭順を利益とする支配者たちの説教の道具として悪用される危険性があるからだという。そもそもこの詩がなぜ「ブルジョア・イデオロギー」であるかと言えば、それは搾取社会における美徳である仏教思想を根底に置いているからで、「恵み与えん」とする賢治の愛も、結局は階級的「ゴマ化し」にすぎず、「『善意』も科学性がないと『悪意』そのもの」に転ずると佐藤は非難した[24]。

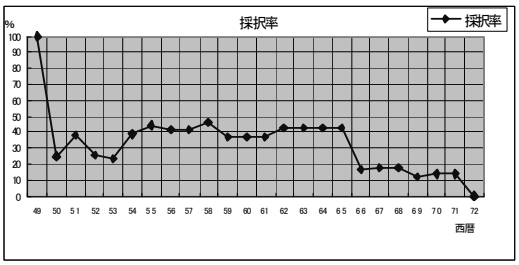
一方、『山びこ学校』の出版にも尽力した国語学者の国分一太郎は、実用性という観点から賢治文学を批判した。国分によれば、賢治が「世のなかの進んでいく方向」を把握していなかったために、彼の童話にはただ面白さや珍奇さを追求したような「しろうととしての弱さ」があるという。彼らが本当に必要とするのは、むしろ、より現実的、具体的困難を「のりこえていく方向」を提示している『山びこ学校』の生徒たちの討議であって、「デタラメな歌をうたったり、みょうな議論や空想をしたり」する賢治童話などは、「そう大したいみはない」から読み飛ばしてかまわないと生徒たちに促した[25]。

以上のように、敗戦から数年を経、「新しい道徳」を求める者たちによって、〈宮沢賢治〉は反・戦後的、否定的人間像として形象されるようになった。敗戦直後に見られた〈政治的人間〉像と〈宗教的人間〉像との相克劇は、結局は〈宗教的人間〉像の方に収斂され、政治色が極端に薄められて、より聖人としての趣を増した「雨ニモマケズ」的〈宮沢賢治〉が、以後、戦後国語教科書の「安定教材」として長く君臨したのである。

4　「雨ニモマケズ」と国語教科書

前節で見たように、1950年代の言論界での〈宮沢賢治〉批判とはあたかも無関係のように、「雨ニモマケズ」は国語教科書という分野で敗戦直後から1960年代半ばまで、一貫して勢力を保持し続けた。本稿では国立教育研究所付属図書館編『中学校国語教科書内容索引』（教科書研究センター、1986）を参照し、戦後国語教科書（1949－1986）における「雨ニモマケズ」の収録状況を検証したが、その結果、同研究所が所蔵する計132種類の中学校国語教科書のうち39種（29％）に、一部掲載を含めた「雨ニモマケズ」関連テクストが収録されていた。

下記の「グラフ」はその採択率の推移を示したものである。その収録教科書数の推移についてであるが、一九五八年の一四種（46％）を頂点に1955年前後から1965年までの期間、各年40％前後の高い採択率で「雨ニモマケズ」が掲載されている。その数が目立って減少するのは1966年以降、完全に姿を消すのは1972年以降である。すなわち、1950年代半ばをピークとした〈政治的人間=賢治〉像への反発の噴出は、逆に〈宗教的人間=賢治〉像を体現した「雨ニモマケズ」の採択率を高める働きをなしたものと解することができる。



次に収録教科書の内容を確認したい。検証の結果、39種中28種（71％）までが、純粋な詩教材としてではなく、伝記やエッセイ教材として「雨ニモマケズ」を扱っていることがわかった。使用年

度にかかわらず伝記・エッセイ併記型テクストの占める割合が高い。ではなぜ「詩」としては平易な部類に属する「雨ニモマケズ」に、第三者の鑑賞文や伝記的エッセイが添えられたのだろうか。「雨ニモマケズ」の収められた単元名が「真実に生きる」（東京書籍）、「心を清くする話」（教育図書）、「たゆまぬ心」（学校図書）、「すぐれた人々」（三省堂）等であったことから推測すれば、本テクストの採択理由は近代詩としての価値にあったというより、むしろ「雨ニモマケズ」的人間像の提示という、道徳教材としての価値にあったと考えられる。しかし一方では、前述したような事情から、軍国主義からマルクス主義まで教科書編集者たちにとって不都合な文脈に解される危険性もあったために、伝記やエッセイを併記することで読みを一元化したいという、編集者側の意図があったのではないか。

また39種中９種（23％）が底本のカタカナ表記をひらがな表記に改めている。それらの多くが1950年代に使用されたテクストであることには注意を要する。敗戦以前のカタカナ表記については、明治政府が勅令第1号「公文式」（1886年）でカタカナ漢文体を採用し、詔書や法律文、公文書の類にこれが用いられたが、一方では「満洲」事変を契機とした日本語の大陸進出において、カタカナは簡便な普及用言語としてアジア各地に広められた。これに対し、敗戦後は国語の「民主化」が多方面から求められ、1946年４月、ひらがな口語体による憲法改正案が公表されたのを機に官庁用語もこれに倣い、６月の議会開院式の勅語にもひらがな口語体が用いられた。しかし、他方では貴族院が国語改革への反発を示し、カタカナ漢文体を改めなかった[26]。こうした事例からも窺えるように、戦後においてカタカナ表記は、ある種の戦前的・反民主的イメージを喚起しやすい状況にあった。「雨ニモマケズ」の表記をひらがなに改めた教科書の大部分が、1955年以前の検定通過であったことに留意するならば、当時のカタカナ表記が喚起しがちであった負のイメージからテクストを極力切り離そうとする、編集者側の時代的配慮を看取することができるのではないか。

さらに谷川徹三の講演記録、「今日の心がまへ」からの抜粋が1950年代半ばをピークとして39種中９種（23％）存在するが、繰り返しになるが、谷川が戦中におこなった本講演の趣旨は、今まさに国家的危機に直面している日本国民に、死の「心がまへ」を説くことにあった。そうした性格のテクストが、戦後の国語教科書に十数年間も掲載されつづけたことには驚きすら感じるが、実際内容を確認すると、死の美学を説いたような差し障りのある箇所はほとんど削除されており、どれも一読した限りではそれほど違和感を与えるものとはなっていない。

しかし、問題がまったくなかったわけではない。たとえば1949年から４年間使用された教育図書『国語』（一・①）[27] では、「雨ニモマケズ」が「明治以後の日本人の作ったあらゆる詩の中で最高の詩」であると記された後に、本詩の書かれた「十一月三日」が「なつかしいかつての天長節」にあたり、本詩を「かくまで純粋な表現にまで押し出したその心の昂揚に、この十一月三日という日にからまる感情が作用している」と書かれてある。これを文脈どおりに解せば、明治天皇に対する敬虔な思いの強さが「雨ニモマケズ」を「明治以後」の「最高の詩」へと押し上げたことになり、戦前の皇国思想との断絶をめざした戦後国語教科書にふさわしい内容であったとはいえない。そもそも教科書という複数の作家が並べ置かれる場に、特定の作家を「最高」と位置づけるようなヒエラルキーを持ち込むことは、生徒たちに一方的な価値観を押しつけることにもなりかねない。たとえば1954年から８年間使用された学校図書『中等文学改訂』（二）[28] には、鴎外・漱石の墓の前には「ひざまずきたいとは考え」ないが賢治の墓の前には「ひざまずきたい」といった、あるいは透谷・一葉・啄木らと比較して「それらの何びとにもまして賢治の名は」「大きくなる」といった、いささか独断的な記述が頻出する。

ではなぜこうした問題を孕む谷川のテクストを多くの教科書が掲載しつづけたのか。そこにはやはり、1950年代の言論界における賢治批判の影響があったように思われる。著名な「雨ニモマケズ」論争の中で、谷川が中村稔の『宮沢賢治』（書肆ユリイカ、1955）、中村光夫の『志賀直哉

論』（文芸春秋新社、1954）を挙げ、「志賀直哉はあれで片づいた、宮沢賢治はあれで片づいたと思われたら」「とんでもない」と言及していたように、1950年代に批判を浴びたのは、〈宮沢賢治〉ひとりではなかった。時に「オールド・リベラリスト」の名で呼ばれる志賀直哉、武者小路実篤、山本有三、津田左右吉、和辻哲郎、そして谷川徹三もまたこの時期守勢に立たされていたのであり、彼の賢治擁護には、賢治論争に仮託した形での、戦前知識人の「善意」に対する自己弁護的な要素が多分に含まれていた。さらにそうした心情は、1950年代の教科書編集者たちにも少なからず共有されていたと想像され、そのことが谷川への追い風となり採択に結びついた面もあったのではないか。

しかし、そうした分裂の様相も1950年代半ばをピークとして国際情勢の「雪どけ」とともに徐々に緩和されていったが、一方、このよう1950年代的議論がやや時期を逸して1960年代に再燃したのが、谷川徹三と中村稔との間に生じた「雨ニモマケズ」論争だった。著名な論争であるため詳細は割愛するが、その骨子をたどれば以下のようになる。

戦争末期の谷川は、前述したとおり本「詩」を「明治以後の日本人の作った凡ゆる詩の中で、最高の詩である」と称揚したが、これに対し1955に中村は、「羅須地人協会の挫折ののち」「心弱くも書きおとした過失」であったとし、「宮沢賢治のあらゆる著作の中でもっともとるにたらぬ作品のひとつ」[29] であると反駁した。ところが、1950年代には過激な賢治批判にも沈黙を守っていた谷川が、1963年になって突如攻勢に転じ、中村に強く反発するとともに、〈宮沢賢治〉を「聖者」と呼び「イエス」や「孔子」や「プラトン」にもなぞらえたのである[30]。こうした論調は、賢治を「菩薩」に、「雨ニモマケズ」を「お題目」になぞらえるような、敗戦直後に見られた極端な賢治賛美を彷彿させるものだった。

それでは、こうした論争に対する1960年代の教科書編集者たちの反応はどうであったか。「グラフ」における採択率の急落にも窺えるように、結論から言えば時期はずれの論争は、かつてのように谷川への追い風を吹かせなかったばかりか、逆にこうした議論自体への関心の減退を加速させたように思われる。「雨ニモマケズ」的〈宗教的人間〉像に普遍的な人間の理想像を見ていた谷川は、論争の中でそれを「切り捨ててはならぬもの」であると力説したが、国語教科書における掲載数の推移を見るかぎり、結果として「雨ニモマケズ」論争は、〈賢治に理想的人間像を見るか、否か〉という1950年代的議論の終焉を告げる役割を果たしたと解することができるだろう。

注

1 1931年11月3日の日付をもつがタイトルはない。賢治逝去の後、大トランク蓋裏ポケットより発見された手帳に書かれてあったもので、本稿では便宜上「雨ニモマケズ」と呼ぶことにする。初出は1934年9月21日号『岩手日報』、全集収録の最初は『宮沢賢治全集』第6巻（十字屋書店、1944）であった。

2 伊藤信吉『鑑賞現代詩Ⅱ』（筑摩書房、1962）244・245頁。

3 「綱要」末尾に「一九二六年」とあるが、詳細は未詳。消失以前に刊行された十字屋版全集（1944）所収本文、佐藤隆房『宮沢賢治』（冨山房、1942）所収口絵写真などによって、その一部が今日伝えられる。

4 佐藤隆房「賢治と日本精神」（『新岩手日報』1942.10.1日号）、『宮沢賢治研究資料集成』第3巻（日本図書センター、1990）29頁。

5 森荘巳池『宮沢賢治』（小学館、1943）258・259頁。

6 谷川徹三『雨ニモマケズ』（日本叢書四）（生活社、1945）、前掲『宮沢賢治研究資料集成』第3巻、219頁。

7 小熊英二『民主と愛国』（新曜社、2002）44・50頁。

8 森荘巳池「『風大哥』のこと」（『季刊新児童文化』1946年8月号、復刊第1冊）、前掲『宮沢賢治研究資料集成』第3巻、351・352頁。

9 石田吉貞「賢治と草庵――山庵雑記」（『岩手タ

イムス』）19462.1日号、前掲『宮沢賢治研究資料集成』第3巻、251頁。

[10] 石森延男『石森読本　六年生』（小学館、1983年7月）173・174頁。

[11] 本論を書くにあたり、国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館、東書文庫、教科書研究センター付属教科書図書館を利用したが、今回の調査では第六次国定教科書『高等国語二下』初版本の所在を確認することができなかった。したがって「農民芸術論」が「綱要」中の本文から成ると記したのは、谷川徹三の言及箇所（注13）からの判断に過ぎず、ご教示を得られれば幸いである。

[12] 吉田裕久『戦後初期国語教科書史研究――墨ぬり・暫定・国定・検定』（風間書房、2001）547頁。

[13] 谷川徹三「第四次元の芸術」（『四次元』1950年2月号）102頁。

[14] 石森延男「国語教育の回顧と展望（三）」『国語教育講座』第5巻（刀江書院、1951）78頁。

[15] 谷川徹三『宮沢賢治』（要書房、1951）77頁。

[16] 谷川徹三「平和の哲学」（『中央公論』、1950年9月号）。

[17] 小野十三郎「宮沢賢治の韻律」（『コスモス』1946年9月号）、前掲『宮沢賢治研究資料集成』第3巻、361頁。

[18] 吉田裕久前掲書によれば、『高等国語二下』の翻刻発行日は1947年9月26日、発行完了日は同年12月5日であった。したがって「農民芸術論」掲載の初版本は、最も長い期間使用した者でもわずか半年にすぎなかった

[19] 小倉豊文「賢治菩薩如是我聞」（『農民芸術』1946年5月号）、前掲『宮沢賢治研究資料集成』第3巻、302頁。

[20] 森荘巳池「選民と賤民――『雨ニモマケズ』をめぐる断想」（『農民芸術』、1946年5月号）、前掲『宮沢賢治研究資料集成』第3巻、262頁。

[21] 「道徳教育の在り方」（『朝日新聞』、1950年12月1日号社説）。

[22] 「道徳教育振興に関する答申」（教育審議会、1951年1月）、『戦後日本教育資料集成』（三一書房、1983）第3巻、341頁。

[23] 無着成恭編『山びこ学校』（青銅社、1951）203－205頁。

[24] 佐藤勝治『宮沢賢治批判――賢治愛好者への参考意見』（十字屋書店、1952）、前掲『宮沢賢治研究資料集成』第9巻、43、45－46、56頁

[25] 国分一太郎『国語と文学の教室　宮沢賢治』（福村書店、1952）、前掲『宮沢賢治研究資料集成』第8巻、318－320・324頁。

[26] 平井昌夫『国語国字問題の歴史』（昭森社、1948）403－413頁。

[27] 『国語』（教育文化研究会）一年①、23頁。

[28] 『中等文学改訂』（久松潜一・池田亀鑑）二年、106－107頁。

[29] 中村稔『宮沢賢治』（一九五五、書肆ユリイカ）112・127頁。

[30] 谷川徹三「われはこれ塔建つるもの」（『世界』1963年3月号）301頁。